2020 年 7 月 26 日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　主日礼拝　NO.1130
聖　　書　　レビ記 9:22~24／ローマの信徒への手紙 12:1
説　　教　『 レビ記の礼拝 』　　長崎 哲夫　牧師

これまで、旧約聖書の初めから順次説教をし、前回で出エジプト記までを扱った。そこで創世記・出エジプト記両書に貫かれていたものは、「礼拝」であった。
例えば、甥ロトと別れたアブラハムはヘブロンで初めて「主のために祭壇を築いた」（創 13:18）があり、このアブラハムが主の山での息イサクを献げる礼拝（同 22:1）、イサクの次男ヤコブのベテルでの請願(同 28:10)、荒野におけるモーセの最初の礼拝(出エ 3:1)等実に印象深かった。

本日与えられたレビ記は、ほかの書物同様「主は臨在の幕屋からモーセを呼んで仰せになった」(1-1)から書名は、主が「呼んだ」を意味するレビで、創世記・出エに次ぐ旧約律法五書（トーラー）の第 3 書。
その内容は、ユダヤ人の宗教・道徳・生活に関する口伝律法（タルムード）では幕屋の祭司と神の民が神の前で如何に「清潔」であるべきかが扱われる。

モーセがシナイ山に登った時主は「あなたたちは全ての民の間にあって聖なる民」「あなたたちは、わたしにとって祭司の大国、聖なる国民となる」（出エ 19:1-6）と民に言われ、具体的に彼らが「如何に神に犠牲を献げ、如何に神の前に身を清く保ち、如何に聖なる民として行動すべきか」と主の民の礼拝に備える姿勢が示されていた。

「聖なる神」の「聖」は通常世俗との区別または分離の意味だが、聖はまたしばしば「火」(出エ 19:18)でもあり、主は「熱情(嫉妬)の神」（出エ 34:14）であり、神以外のものを神とさせない。
また、「神は聖において輝き、ほむべき御業を行う方」（出エ 15:11）であると共に、聖はまた「怒りに終わらず、憐れみに胸焼かれる」（ホセ 11:8）でもあった。

前述のように、レビ記冒頭主が臨在の幕屋からモーセを呼んで礼拝させたのは「献げもの」をしてのものだった。
これは後のパウロの礼拝論（ロマ 12:1）にも大きな影響を与えた。特に、神の前の賛美や祈りや懺悔は言葉ではなく、民の日常生活に密着した動物の犠牲、収穫された穀物を焼いて神の前に立てる香りが必要だった。
それらの神への礼拝(献げもの)は、人の罪を贖い・清め・拭い去り・罪を負うため、無傷の牛・羊・山羊・鳩を祭壇で焼き尽くし、「主に献げる宥めの香り」(1:13)とした。

かつて、ノアは家族と共に箱舟から出た時主のために祭壇を築き、焼き尽くす献げものを献げると、神は宥めの香り(燔祭)をかいで御心を語られたとある(創 8:20)。
さらにレビ記７：３２には焼き尽くす（燔祭）、穀物とその一部を焼く（素祭）、祭司や一般人の贖罪（罪祭）、誤った罪の賠償（愆祭）、祭司の任職(任職祭)、主との平和と和解（酬恩祭）を主がモーセを通してイスラエルの民に指示された。
それらの犠牲作業を司ったのは、モーセより三歳年長の兄アロンで、モーセの代弁者(出エ 7:1)、ファラオとの雄弁な交渉人（同 4:14）だったが、モーセの長期にわたる山上滞在に民に乞われて金の子牛礼拝をした人(同 32:1)。

その間民の間に広がった疫病を治めた「香炉」は特筆され（民 17)、生涯モーセに仕えて 123 年生き、エドム国境の山ホルで死んだ(民 20:22)。

ヘブル書は、アロンを大祭司の原型として格調高く語ると共に、それよりも「あなたはわたしの子、今日わたしはあなたを産んだ」と言われた「大祭司キリスト」が讃えられている(5:1)。